

機関番号：12601

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20529002

研究課題名 (和文) 『瑜伽師地論』とアビダルマ仏教の思想的関連について

研究課題名 (英文) The relationship between the *Yogācārabhūmi* and abhidharma

研究代表者

高橋 晃一 (TAKAHASHI KOICHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任研究員

研究者番号：70345239

研究成果の概要 (和文): 本研究において、インド大乘仏教の一学派であるヨーガーチャーラと、アビダルマ仏教の思想的関係について、新たな知見を提示した。特に、『アビダルマ・コーシャ』が無我説の根拠として引用する経典が、ヨーガーチャーラの最も古い思想を伝える文献『菩薩地』に、出典を明示せずに引用されていることを明らかにした点は、大乘思想の形成期における先行思想の受容形式を理解する上で重要な成果と言える。

研究成果の概要 (英文): This study found new examples of the relationship between Yogācāra and Ābhidhārmika. The following example is considered to be especially significant. The *Abhidharmakośabhāṣya*, one of the most important works of the Abhidharma Buddhism, cited a sutra named *Mānuṣyakasūtra* as a proof of the Selflessness or *nairātmya*. A paragraph parallel to the sutra can be found in the *Bodhisattvabhūmi*, one of the oldest texts of the Yogācāra School. This fact provably indicates that the early Yogācāra philosophers were influenced by the canonical texts preserved among the Abhidharma Buddhism.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	0	800,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	390,000	2,490,000

研究分野：インド仏教学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：ヨーガーチャーラ、アビダルマ、ヴァスバンドゥ

## 1. 研究開始当初の背景

瑜伽行派 (ヨーガーチャーラ) とアビダルマの思想的関係はこれまでも、指摘されていた。瑜伽行派の思想は、外界の対象物の存在を認めない点に特徴があり、そのため一般的には唯識思想と称される。一方、アビダルマとは、ブッダの教説に基づいて存在物を分類し、それぞれの存在物の特徴やそれら相互の関係を分析した教理体系である。思想的には初期のアビダルマは瑜伽行派の登場に先ん

じており、特に瑜伽行派の思想を体系的にまとめた大部の著作である『瑜伽師地論』(四世紀頃)は、アビダルマの思想体系を取り込む形で成立したと考えられている。

しかし、近年は特に瑜伽行派からアビダルマへの思想的影響が強く主張される傾向がある (代表的な研究として、R.Kritzer, *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi, Yogācāra Elements in the Abhidharmakośabhāṣya*, *Studia Philologica*

Buddhica Monograph Series 18, Tokyo, 2005 参照)。こうした見解の背景には、アビダルマ思想の一完成形とも言える著作『アビダルマ・コーシャ』(五世紀頃)に、先述の『瑜伽師地論』からの影響を読み取ることができるという事情がある。確かにある部分については、こうした傾向を認めなければ、『アビダルマ・コーシャ』の内容を理解できないことは事実であろう。しかし、瑜伽行派の教説とアビダルマの思想体系の関係は、単純なものではない。少なくとも、以下の三つの類型を想定し、考察しなければ、両思想の発展史的關係は明らかにならない。

- ①アビダルマから瑜伽行派への影響
- ②瑜伽行派からアビダルマへの影響
- ③両者に共通する思想的淵源

①はアビダルマという思想が瑜伽行派の成立に先んじているという歴史的事実に基づく、ごく自然な、しかしある意味では単純な思想史観を反映している。

このような単純な思想史観に対する反動から、②のように、瑜伽行派からアビダルマへの影響を考える研究が現れるようになった。こうした研究動向の中で、アビダルマ思想が成熟し大成する時期の作品である『アビダルマ・コーシャ』には、同時期に活動を始めたと思われる瑜伽行派の思想的影響が見られる点が強調された。実際、『アビダルマ・コーシャ』の著者であるヴァスバンドゥは、後に瑜伽行派に転向したと考えられており、その意味では瑜伽行派からアビダルマへの思想的影響を念頭に置いて、両者の関係を論じることは、ある意味では妥当であると言える。

しかしながら、この②に注目する研究では、瑜伽行派からアビダルマへの思想的影響をうらづける文献的根拠が列挙される状況にあるが、そうした根拠の中には必ずしも容認されないものも含まれていた。例えば、『瑜伽師地論』から影響を受けたとされる『アビダルマ・コーシャ』の文章が、実際には他のアビダルマ文献に遡及しうるものであり、必ずしも『瑜伽師地論』を根拠とする必要がない例も含まれている (Koichi TAKAHASHI, Review: *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi by R.Kritzer; the Eastern Buddhist new series vol.36, no.1-2*, 2005 参照)。

そのため、本研究開始当初において、③の視点から、さらに両思想の関係を再検証することが要請されていた。

## 2. 研究の目的

瑜伽行派とアビダルマの思想的影響関係について、『瑜伽師地論』と『アビダルマ・

コーシャ』を中心にその関係を再考察することを目的としている。特に、近年強調されているような、『瑜伽師地論』から『アビダルマ・コーシャ』への思想的影響を強調することが、必ずしも両者の思想的関係を考える上で絶対的なものではないことを示し、むしろ、両者に共通する思想的な背景が存在することに着目し、両者の思想史的発展をとらえ直すことを目指している。

## 3. 研究の方法

(1) 『アビダルマ・コーシャ』において瑜伽行派への言及の目印とされる *pūrvācārya* の主張を抽出し、その内容を『瑜伽師地論』にたどることの妥当性を検証した。

『アビダルマ・コーシャ』から抽出すべき箇所は、ほとんど先行研究によって指摘されており、今回新たに付け加えるべきものはなかったが、瑜伽行派の文献による裏付けについては、『瑜伽師地論』以外の文献からも多角的に考察されるべきものがあった。特に瑜伽行派の創成期の思想家であるアサンガの『アビダルマ・サムッチャヤ』や『顕揚聖教論』との比較は、『アビダルマ・コーシャ』の内容が単純に『瑜伽師地論』からの影響だけでなく、より多角的な視点での考察が必要であることを示すために有意義である。

(2) その他、『アビダルマ・コーシャ』と『瑜伽師地論』の共通点を探し、その意義を検証した。特に、両文献に共通して引用される『阿含』(いわゆる原始仏典、ブッダおよびその弟子たちの間で発生し伝承された初期の経典)を調査し、その解釈の発展を考察した。

この方法により、『アビダルマ・コーシャ』と『瑜伽師地論』の影響関係が、単純に相互に影響を与えあったというのではなく、そもそも思想的な背景を共有していた可能性も示すことができるものと考えられる。

## 4. 研究成果

(1) 『アビダルマ・コーシャ』と『瑜伽師地論』に共通する思想的淵源について

『瑜伽師地論』は一般的にいくつかの思想史的発展段階に分けることができると考えられている。特に唯識思想の登場を基準にすると、典型的な術語である「アーヤ識説」や「三性説」が説かれる部分(新層)とそれらに全く言及しない部分(古層)に分けることができる。古層に属する部分のうち、哲学的な思索を探るという意味で最も重要な部分は『菩薩地』と称される箇所である。この『菩薩地』は、瑜伽行派の思想の代名詞である唯識思想に言及しないだけでなく、そもそも実在を意味するヴァストゥ(vastu)という概念を中心に思想が構成されており、その意

味で瑜伽行派の思想史において、特異な文献と言える。

この『菩薩地』の中に、『アビダルマ・コーシャ』が無我説の教証として引用する阿含經典である *Māṇuṣyakasūtra* が、引用であることを明示されないまま引かれている。この事実自体、これまで見落とされていたことではあり、今回の研究で初めて指摘するものだが、さらに本研究ではこれを手掛かりに、初期瑜伽行派の無我説の背景に、アビダルマ思想が影響していることを考察した。(ここで言うアビダルマ思想とは、『アビダルマ・コーシャ』の思想という意味ではなく、広い意味でのアビダルマという一群の思想動向を指す。)

無我説は仏教思想を考える上で重要な思想であり、一般的には、アビダルマ仏教では人無我が説かれ、一方、大乘仏教ではさらに進んで法無我が説かれたと考えられている。人無我とは、「人間」という確固とした存在ではなく、実際には個体を構成する五蘊(色・受・想・行・識)に対して、「人間」という存在を仮に想定しているだけに過ぎないとする考え方である。それに対して法無我は、大乘仏教の中でも様々な見解があり、端的に説明することは難しいが、『菩薩地』に見られる最初期の瑜伽行派の見解は、五蘊として列挙される「色」なども、実際にはいかなる概念化をも離れた実在であるヴァストゥに対して、「色」などの言語表現を通じて仮に想定されたものに過ぎないのであり、その意味で非実在的な存在であるということが、法無我の意味であると説明する。

この『菩薩地』の法無我の発想は、仮に想定された存在と、その背景にある実在から構成されている点で、『アビダルマ・コーシャ』などのアビダルマ文献で説かれる人無我説と類似していることは、容易に理解できるが、両者の関係を実証的に考察することは従来の研究ではなされていない。しかし、『菩薩地』が、先述の *Māṇuṣyakasūtra* を引用しており、しかもそれが『アビダルマ・コーシャ』において、アビダルマ仏教の人無我説を裏付ける根拠とされていることを考慮すると、『菩薩地』の法無我理解とアビダルマの人無我説の類似性は、単なる偶然ではないことが分かる。すなわち、最初期の瑜伽行派の法無我説は、アビダルマの人無我説と共通の起源を有するものであり、アビダルマ的な人無我理解を法無我の理解に敷衍したものであることが分かる。

こうした事実は、瑜伽行派とアビダルマ思想的交渉が、先行研究で主張されるような単純なものではなく、ある共通の原初的な思想に対する解釈の模索を反映したものである可能性を示している。

この研究成果は、” Why was the

*Māṇuṣyakasūtra* cited in the *Bodhisattvabhūmi*? An example of a shared scripture in the abhidharma and Yogācāra philosophy”として、『印度学仏教学研究』57-3(2009)に掲載され、これをもとに、2009年9月に日本印度学仏教学会賞を受賞した。

(2) 『アビダルマ・コーシャ』が瑜伽行派の思想を批判する例

『アビダルマ・コーシャ』が『瑜伽師地論』の影響を受けているとする先行研究では、多くの場合、『瑜伽師地論』に代表される瑜伽行派の教説を『アビダルマ・コーシャ』が受容していると考えている。しかし、詳細に見ると、『アビダルマ・コーシャ』が瑜伽行派の教説を批判している場合も見受けられる。

例えば、『縁起経』などの『阿含經典』にしばしば見られる「縁起の定型句」の解釈をめぐる一連の議論の中で、『アビダルマ・コーシャ』は、*acārya* (古典期の注釈者は *pūrvācārya* とする) の解釈に言及しており、先行研究はそれを『瑜伽師地論』の一節に遡及しうるものと見なしているが、詳細に検討すると、この理解には疑問が残る。

「縁起の定型句」とは、「これがあるときにそれが生じる」という経文の一節である。この一文を前半と後半、すなわち「これがあるときにそれが生じる」と、「これが生じることでそれが生じる」に分けたとしても、両者はほぼ同じ内容を述べているように理解できるが、それでは、なぜ、この経文は同じ内容を二通りの表現で繰り返し述べるのかということが、アビダルマ思想家達の間で問題とされた時期があったらしい。『アビダルマ・コーシャ』は、この問題に対して、いくつかの解釈例を提示したのち、「ある人たちの説」として「前半は原因なしに結果が生じることがないことを示し、後半は恒常的な原因から結果が生じることがないことを示す」という解釈を紹介している。『アビダルマ・コーシャ』は、この説に対しては、明確に批判的な態度を示しており、一通り批判し終えた後で、*acārya* の説を引き、原因を断絶しないことと、原因の生起を示すために、經典は二通りに表現していると説明する。

先述の Kritzer 氏の研究などは、この *acārya* の説を『瑜伽師地論』に遡及しうるとしているが、先行研究が提示する『瑜伽師地論』の記述を詳細に検討すると、むしろ内容は「存在しない原因や、恒常的な原因から結果が生じることがない」と説明するものであり、『アビダルマ・コーシャ』が批判する「ある人たちの説」に近いことが分かる。

この『瑜伽師地論』の内容は、瑜伽行派の

代表的な思想家であるアサンガに継承されているが、それによれば、経文の前半を無因論批判、後半を常因論批判に当てていることは明白である。すなわち、『アビダルマ・コーシャ』が *acārya* 説として紹介する解釈は、『瑜伽師地論』の内容とは若干異なっており、むしろ批判されている「ある人たちの説」こそが『瑜伽師地論』をはじめとする初期の瑜伽行派の思想家の説に近いことが分かる。

なお、この研究の成果は、「『俱舍論』における Vasubandhu の瑜伽行派説に対する批判的見解」と題して、日本印度学仏教学会第60回学術大会（大谷大学、2009年9月9日）において発表した。

### (3) その他

古代インドの身分制度であるヴァルナ制に関して、律典などの内容と比較しながら、『瑜伽師地論』の関連箇所を抽出し、その特徴を明らかにしようと試みた。その際、これまでサンスクリットのテキスト校訂がなされていない箇所に関して、校訂を試みた。

この成果は、「仏教文献に見るヴァルナ観」と題して、日本南アジア学会第23回全国大会（2010年10月2日、法政大学多摩キャンパス）において発表した。

こうしたことから、瑜伽行派とアビダルマの思想的関係は、その方向性・受容の形式に関して単純ではなく、今後も検討を要する課題であると言える。将来において、アビダルマが瑜伽行派を批判する例を収集し、瑜伽行派の思想を別な視点から考察することが求められる。なお、口頭発表のみで、論文として公表されていない部分もあるが、これらも論文として成果発表できるよう準備を進めている。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

高橋晃一、Why was the *Mānuṣyakasūtra* cited in the *Bodhisattvabhūmi*? An example of a shared scripture in the abhidharma and Yogācāra philosophy、印度学仏教学研究、57-3、2009、(87)-(93)。査読有

〔学会発表〕（計3件）

① 高橋晃一、仏教文献に見るヴァルナ観、日

本南アジア学会第23回全国大会、2010年10月2日、法政大学多摩キャンパス

② 高橋晃一、『俱舍論』における Vasubandhu の瑜伽行派説に対する批判的見解、日本印度学仏教学会第60回学術大会、2009年9月9日、大谷大学

③ 高橋晃一、『菩薩地』に引用される *Mānuṣyakasūtra*、日本印度学仏教学会第59回学術大会、2008年9月5日、愛知学院大学

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
特になし。

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 晃一 (TAKAHASHI KOICHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任  
研究員

研究者番号：70345239